「日本版DBS」への期待と、法のすきまへの懸念

学習塾での性加害どう防ぐ

生徒への性加害が発覚したことで、学習塾の「安全」が大きく揺らいでいる。防犯カメラの設置など、「密室」を避ける対策だけで十分といえるのか。

受験を控えた子どもにとって塾講師は「伴走者」でもある。「先生を尊敬すればするほど従順になる。だからこそ胸糞悪い」とある母親は言う

塾の補講を受ける生徒を待ち構えていたのは、講師ではなく性加害者だった。

教え子の女子児童(9)にわいせつな言葉を口にさせ、その様子を撮影したとして進学塾大手「四谷大塚」元講師の森崇翔(そうしょう)容疑者(24)が逮捕された。森容疑者は今年5月ごろ、授業のない日に「指導」の名目で生徒を教室に呼び出し、

「勉強しないとお仕置きする」

と脅し、わいせつな言葉を口にさせた。生徒は床に体育座りをさせられ、下着が見える状態だったという。森容疑者はその様子を撮影した疑いが持たれている。

森容疑者はこうした行為について、複数人が閲覧するSNSのチャットグループに投稿し、〈どうせ撮影するなら、普段通りの短パンで来て欲しいですね〉〈押し倒してレイプしちゃうかもしれません〉

などと記していたことも報じられている。被害生徒は他にも複数おり、自宅の住所や通っている小学校名などの個人情報が送信されていたこともわかった。森容疑者は、事件発覚後に懲戒解雇されている。

「家庭が信頼して我が子を長時間預けているのをいいことに、今回の事件はとりわけ悪質です」

そう話すのは、数年前に娘が四谷大塚に通っていたという女性だ。通塾時に性加害を見聞きしたことはないが、事件を聞き、そのひどさに衝撃を受けた。

「四谷大塚は私が子どもの頃から中学受験塾の代名詞のような存在です。授業のない日も登校できるというのは本来いいこと。絶対に許すことはできません」

インスタで生徒と連絡

事件を受け、四谷大塚は全教室にカメラを設置し、保護者がリアルタイムで確認できる「ライブモニタリングシステム」を導入すると発表。また、講師の採用にあたっては、心理テストや性格テストを活用するとしている。ほかの大手学習塾でも、すでに教室に防犯カメラを設置するなど「密室」を避けるよう工夫する。

だが、こうした対策は抑止にこそなれ、根本的な解決にはならない。

「カメラの死角を探したり、個人的につながったりといくらでも抜け道はあります」

そう指摘するのは、大船榎本クリニック精神保健福祉部長で『「小児性愛」という病―それは、愛ではない』の著書がある斉藤章佳さんだ。「不用意に児童に接触しない」「二人きりにならない」など環境を工夫することは重要だが、それだけで防ぐことは難しいという。

実際に、大学生の頃に学習塾でアルバイトをしていたという女性(29)は、塾の実態についてこう説明する。

「卒塾するまで生徒と連絡先を交換するのは禁止されていました。でも、インスタを使えば簡単につながれる。生徒からアカウントを見つけられることもあ

四谷大塚は対策としてモニタリングシステムを打ち出した。「保護者にも小児性愛者はいるはず。賛成できない」と不安を打ち明ける人も

photo Getty Images(上) 西村尚己/アフロ(下)

るし、生徒のやつを見つけて、『かわいいよね』と友達に見せびらかす人もいましたよ」

10人に1人が小児性愛

アエラは、SNSなどを通じて「子どもと性加害」についてのアンケートを実施。塾のほか、学校や学童で性加害を受けたり、目撃したという声が集まった＝左の一覧。

特徴的だったのは、性加害を受けた人の多くが「周囲に相談しなかった」と回答したことだ。「当時はなにかわからなかった」と被害を認識できていなかったケースのほか、「自分が悪いと思った」「期待されているとうれしかった」と答えた人もいた。

かつて塾講師から性加害を受けたという20代の女性は、「男性講師から太ももに手を置かれたり、頭をなでられたりして気持ち悪かった。でも、妹も親も『いい塾だ』と言っていたので、相談できませんでした」と小さな声で打ち明ける。女性は、今でも時折当時のことを思い出すという。だが、そのことを誰にも話せずにいる。

「教員や塾講師など、子どもに関わる仕事をしている人の約10%は小児性愛の傾向にあると予測しています」

そう話すのは、性犯罪・性依存治療を専門とする「性障害専門医療センター（SOMEC）」代表の福井裕輝さんだ。多くの加害者と向き合い、治療にあたってきた経験からそう言い切る。

「人口の約5%は小児性愛だと言われています。その上で、小児性愛者が子どもと触れ合う職業を自ら選択するため、率が上がる。先生が10人いれば1人は小児性愛者の可能性があります。ただ、すべての人が加害をするわけではない。加害させない仕組みをつくることが大切です」

その取り組みの一つとして、2019年に同センターの協力のもと長崎県教育委員会が導入したのが「心と性に関するチェックシート」だ。〈無理やりわいせつな行為をする男性の多くは、他の男性よりも性欲が強いかセックスに飢えているからである〉〈今の職場では、女性職員の立場はそんなに強くならなくてもいいと思う〉など全42項目にわたる質問に5段階で回答。一定の点数を超えた人には、センターで相談を受けるよう促している。福井さんは言う。

「セルフチェックなので意味がないという批判もありますが、これをきっかけに実際に治療につながったケースもあります。認知の歪みやストレスの状況などを聞き取り、カウンセリングや性欲を下げる薬物療法を行います」

守秘義務があるため教育委員会や学校に情報が開示されることはない。福井さんは、「日本版DBSなど加害者を社会から排除するだけでなく、治療を含めた社会復帰支援があわせて必要」だと話す。

日本版DBSのすきま

この「日本版DBS」というのは、子どもたちを性加害から守るために、こども家庭庁が創設を検討している制度だ。子どもと接する職場で働く人に性犯罪歴がないことの証明を求めるもので、学校や保育所などを対象に、人を雇用する際に性犯罪歴の確認を義務付ける方針だ。

だが、学習塾については、制度運用のチェックにハードルがある。そのため、義務付けはせず、性犯罪歴を確認するなどの要件を満たした事業者の認定制度の創設を検討している。

日本版DBSへの期待が高まる一方で、「法のすきま」への懸念もある。

「二度と子どもに関わる仕事につかないよう、せめて前科をつけたかったのですが、かないませんでした」

そう説明したのは、都内に住む女性だ。数年前、学童に通う娘がアルバイトの指導員から性加害を受けた。

「キスしてくれたらゲームをやらせてあげる」

指導員はそうささやき、娘をトイレに連れ込み、舌を絡ませるキスをした。さらに、指導員は自身のズボンを下げ、口淫するように言ったという。

「性加害ある」前提に

娘が拒否し、親に相談したことで被害が発覚。だが、日時の記憶が曖昧だったことなどから、事件化できなかった。

現在想定されている日本版DBSでは、性犯罪歴の有無が焦点となっている。こうした「見えない性加害者」にはどう対峙すればいいのか。

前出の斉藤さんは、「子どもへの性加害はある」という前提を持つことが重要だと指摘する。

「塾や学校のように絶対的な地位関係がある閉鎖的な空間は性暴力が極めて起こりやすい。同僚を疑いながら仕事をすることは大変ですが、そんな環境にいるのだと自覚することが結果的に性被害を防ぐことにもつながります」

編集部　福井しほ

本誌に寄せられた性被害の体験談

小学生のとき学校で

先生に「窓を掃除して」と言われて**上の方の窓を拭かされ、その間に撮影された**。それがなにか当時わからなかったから誰にも相談しなかった。（30歳女性）

中学生のとき塾で

ある講師がいつも**ズボンのファスナーを途中まで下げていた**。ずっと大したことではないと思っていたが、よく考えると気持ち悪い。（56歳女性）

高校生のとき学校で

先生が家まで送ってくれるというので車に乗りました。そこで**キスをされました**。「車に乗った自分が悪かった」と思ったので、誰にも相談しませんでした。（50代女性）

中学生のとき学校で

自分の座席より後ろで起きていたことなので目撃していないが、「先生が**生徒の胸を触っていた**」と聞いた。（50代男性）

高校生のとき学校で

受験対策で個別指導を受けていた。**頭をなでられたり、メールで「○○みたいな生徒ばかりならいいのに」と言われたりした**。当時は期待されているとうれしかったが、大人になってみると気持ち悪い。後に他の生徒と付き合っていたという噂を聞いた。（28歳女性）

塾で

男性講師が個別指導と称して女子生徒を残すなり、別日に呼び出すなりして犯罪行為に及んでいました。被害生徒の訴えで発覚した。公務員なら役所に公聴の部局がありますが、**塾は民間企業なので訴えても大体うやむや**。当該の加害者はクビになりましたが、また別の所で働き、同じような行為を繰り返すと思います。（63歳男性）

民間学童で

娘が通っていた民間学童で性被害に遭っていたことを打ち明けてきました。アルバイトの指導員に「**キスしてくれたらスマホゲームをやらせてあげる**」とトイレに連れ込まれ、スマホのゲームをやらせてもらい、舌を絡ませるキスをされました。その後、相手の要求はエスカレートしましたが拒否したそうです。娘はメンタルに不調をきたし、登校困難になりました。（50代女性）